

第二章 追儺ついなにおける鬼

森 貴史

先日、京都市左京区にある吉田神社の境内で、私は鬼に会った。／
節分祭でこつた返す境内を、袴姿はかまの鬼が稚児を引き連れ、練り歩
いていた。「招鬼来福」と記された笏しやくを頭にかざしてもらおうと、
鬼の正面には大変な人だかりができていた。

(万城目学『鴨川ホルモー』あとがき)

一 鬼を祓はらう

節分の豆まき 一月も下旬になると、正月休みの気分は消えうせて、ふたたび通常の生活になじんでくるころであ
ろうか。節分の豆がスーパ―などの店頭にならぶのは、このころである。「鬼は外、福は内」というかけ声とともに、
鬼に豆をばらまいて追い払うという節分の慣習があるゆえである。そもそも、節分とは、そのことばどおり、季節
の変わり目を指し、立春、立夏、立秋、立冬の前日をいう。なかでも、立春の前日である二月三日をいうことが多
い。そして、立春とは、暦のうえで春が始まる日であつて、節分は冬の最終日にあたるのである。つまり、節分

の豆まきとは、新年が始まる直前、一年の最後の季節である冬の最終日に、災厄のシンボルとしての鬼を祓う厄除けの儀式なのである。

この「豆まき」の起源である鬼追いの儀式は、じつはかなり古いものだ。一年の始まりと終わりの区切りとなる時期に、厄除けの祭礼を、とくに農耕儀礼との関連でおこなうことは、世界じゅうで広くみられるものである。

たとえば、イエス・キリストの誕生を祝う精霊降誕祭（クリスマス）の起源もまた、一二月二五日におこなわれるものであるが、もともとは、非キリスト教徒によつて冬至に祝われていた太陽崇拜の祭日でもある。周知のとおり、冬至とはヨーロッパや日本が位置する北半球では昼が一年でもっとも短く、夜がもっとも長い日であるが、このばあい、冬至は太陽の死と再生を祝う日で、やはり暦での季節の区切りをあらわすものであった。日本でも、地方によっては、冬至にゆず湯につかったり、かぼちゃを食べる風習がいまでも存在している。

もうひとつ、日本の例を挙げるとすれば、大晦日の鐘がある。日本の寺院では、一二月三一日である大晦日の夜に新年をまたいで、除夜の鐘を一〇八回鳴らす。この鐘には、一〇八の煩惱を除去して、新年を迎えるという意味があるが、もともとは大晦日のことを「除日」、「除夕」、「除夜」と呼んでいたことに、この鐘の名前は由来している。『漢字源』によると、「除夜」の「除」は「旧年を押しつけて新年を迎える」という意味があり、「歳餘」（大晦日）と同義であるが、その一方で、この除夜の日に厄を「除く」という風習も存在していた。

京都市左京区の吉田神社では、現在でも毎年二月二日から四日にかけての節分会で、その初日の二日夜に鬼追いの儀礼を大々的にとりおこなっている。この演劇的儀礼は〈追儺〉と呼ばれるもので、『日本の祭り文化事典』の記述では、以下のような筋書きである。「……」陰陽師がまず祭文を読み上げると、黄金四つ目の仮面を着け矛と盾を手にした方相氏が、シンシ「仮子」と呼ばれる多くの童を従えて登場し、矛で盾を三度打った後、赤・青・黄

一 鬼を祓う



図 2-1 京都市左京区吉田神社の節分祭りで追儺のようす (吉田神社提供)



図 2-2 四つ目の方相氏の仮面 (吉田神社提供)

の三匹の鬼を追い、最後に上卿しよけい「この儀式の責任者」が桃の弓で葦の矢を射る」。この儀式がもつ意義は、「鬼は儺、すなわちありとあらゆる災いそのものであって、それを追い払う様をあらかじめ演じることで除禍の実現を約束づけようと」することである。

節分の豆まきも、この追儺の行事の一種に含まれる。追儺と方相氏の歴史は古く、この儀式は古代に中国から日本に伝わったのであるが、仮面劇および仮面儀礼とのコンテクストのなかで、両国の宮中や民間で独自に歴史的に発展してきたものである。

本章で言及されるのは、冬から春への、旧年から新年への区切りの日を契機にして、歳の送旧迎新のためにおこなわれる儀礼である追儺と、この儀礼で鬼を追い払う役目を演じる方相氏である。追儺の儀式じたい、古代日本に中国から伝わったものゆえに、日本のみならず、古代中国での方相氏の歴史にも触れることになる。くわえて、方相氏は、四つ目で金色の仮面という風貌に表現されるように異形であるのだが、そこには鬼を打ち負かす力の源が「四つ目」と「金色」という記号で視覚化されていて、古代からの信仰がこめられている。この異貌の方相氏による鬼追いの儀式は、仮面をかぶることで一種の演劇としてなされてきたものであるために、鬼を排除する力との関連で、方相氏の仮面、およびこれによって災厄として祓われる鬼そのものについても論じられていくだろう。

二 追儺の風習

追儺とは「儺」という字は、「人」と「難」で成立しており、「人」は火、「難」は旱魃、落雷、山火事などの災難を指すゆえに、この「儺」という字そのものが「人が火で、悪鬼を祓う災難よけの行事」（『漢字源』）を意味して

おり、すなわち「追儺」と同義である。日本の仏教寺院での追儺は、おもに法会（死者の追善供養の行事）として、新年の平安と豊穰を祈願する正月の修正会（または修正正月会）および修正二会（または修正二月会）の最後におこなわれる。

日本の宮廷で「儺」がおこなわれたことが、平安初期の歴史書に記録されているが、前出のように、もともとは中国の宮廷行事が伝来したのが起源である。そのため、中国での由来に遡及することから、追儺の歴史をたどってみよう。

仏教においては、鬼はすべて邪悪なものだとされ、悪鬼とされるが、中国では元来、鬼はすべて邪鬼や悪鬼ではなかった。「人ノ帰スルトコロヲ鬼トナス」（『説文解字』）、「人ノ死スル、ミナ鬼トイフ」（『礼記』）とあるように、死者の霊こそが鬼であった。しかし、この鬼にはふたとおりあって、天寿をまっとうして亡くなった死者と、非業の最期を遂げた死者である。前者は子孫によって供養され、〈祖霊〉として祀られて、〈鬼神〉となるのだが、後者は凶魂となつて、供養も祀られることもなく、さまざま〈死霊〉として〈悪鬼〉となるのだ。そして、この二種の鬼のあり方に、追儺の原型をみることができるといえる。すなわち、〈鬼神〉が〈悪鬼〉を祓うという構図である。中国で鬼神の登場する仮面劇を「儺戯」というのであるが、方相氏はこれに登場する悪鬼を祓う鬼神、しかも四つの黄金の目をもった鬼神なのであった。

ところで、死者の霊である鬼のもうひとつの特徴は、「之「鬼」ヲ視レドモ形無シ」（『淮南子』）とあるように、不可視の存在であることである。それゆえ、目にみえない鬼神である方相氏を可視化するために、仮面が儀礼のなかで用いられるようになったのではないかという推測も成り立つだろう（萩原秀三郎『鬼の復権』）。

追儺の風習はもともと大晦日におこなわれていたものではなく、また年一度のものでもなかったが、後漢時代と

南北朝時代を経過して、唐代には官民ともに、完全に大晦日の行事として定着した。その理由として、中村喬氏は歳終観念の変化を挙げてゐる。つまり、唐の時代には冬の終わりと春の始まりとの節目を大晦日に設定するようになったからだという。これは、やはり追儺が農耕儀礼の一種であるということに根ざしているのだろう。そして、この唐代の追儺は〈大儺〉と呼ばれ、大晦日におこなわれるようになって、様式は後漢のものが継承されていた。この大儺が日本に最も影響をあたえたものとされており、これを模して、日本の宮廷でも追儺が始められるようになったのである。

三 方相氏の怪奇な相貌

まさしく鬼か獣のごとく 周時代の官制を記した『周礼』の夏官の方相氏の項には、その異様な風采と役割についての記述がある。

「蒙熊皮。黄金四目。玄衣朱裳。執戈揚盾。帥百隸。而時難。以索室毆疫。大喪先匱。及墓人壙。以戈擊四隅。毆方良」(熊の皮をかぶり、黄金の四つ目を持ち、黒き衣に赤の裳をまとい、戈と盾を手にしている。百の隸をひきい、季節の儺の行事のさいには、室内を搜索し疫鬼を追う。大喪のさいには、葬列を先導し、墓穴に入り、戈で四隅をうって、方良を追う)

これよりも具体的な描写は、ほかの文献からも確認できる。『大唐開元禮』に「黄金四つ目の仮面をつけ、右手に戈、左手に盾」とあるほか、『樂府雜錄』には「黄金四つ目の面具」と記されているところから、方相氏は黄金の四つ目があしらわれた仮面をかぶっていたことが推察される。

三 方相氏の怪奇な相貌

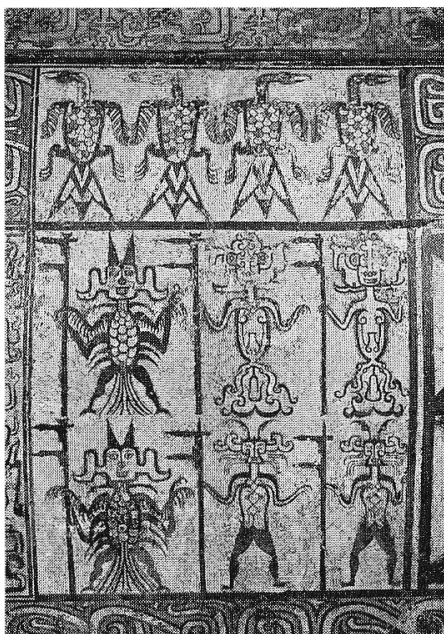


図2-3 曾侯乙墓の内棺側面に描かれた神獣たち
(萩原秀三郎『鬼の復権』)

白川静によると、そもそも方相氏の「氏」は官名で、殷代の職能的氏族のなごりとされる。『周礼』には赤魃せきはつ氏、伊耆いぎ氏といった氏の称号のついたものが五十近く掲載されており、これらの氏の官職の六割が修祓儀礼関係の秋官、器物制作関係の冬官に属していた。方相氏は夏官ではあるが、秋官職と同種であるような、讎を担当する儀礼職能の氏族であっただろう。

方相氏が熊の皮をかぶっていたのは、ひとつには方相氏がもともと獣神であったという信仰に由来するようだ。『後漢書』礼儀志中の大讎の項に「一二獸の毛角を衣たるあり」という記録があるのは、鬼が獣の形姿としてとらえられていたことも示している。これにはおそらく、獣のいでたちで疫病の鬼を威嚇するという考えがあるのだろう。

百の従者をひきいているという描写も、獣神である方相氏が神獣を従えているという解釈がなされている。その例証のひとつは、湖北省隨州市にある戦国早期の曾侯乙墓そうこういっほの内棺側に描かれた二〇体の怪異な像である。これは矛をもっているのだが、方相氏およびその従者たちとみなされている。この異形な像はおそらく、邪鬼から棺を守護するものとして描かれたと思われる。

後漢時代の讎の様式では、方相氏は一二神獸をひきいており、それぞれが甲冑こうきゅう、胙胃ふい、

雄伯、騰簡、攬諸、伯奇、強梁、祖明、委隨、錯斷、窮奇、騰根という名をもち、羽根を角のように立てた仮面をかぶっていた。一二神獸のほかには、〈善董〉を意味する「偃子」を一二〇人も連れており、これらは貴族の子弟から選ばれた一〇歳から一二歳までの子弟で、太鼓をたずさえていた。

黄金四つ目の仮面についても、熊の皮と同様の威嚇効果があるとされる。不可視の祖霊や死者の魂が憑依した面具を「魑頭」と呼ぶが、後漢の經學者（儒者の經典研究者）の鄭玄による『周礼』の注釈に「今の〈魑頭〉にあたる」と明言されているように、方相氏は、後漢時代では「魑頭」と呼ばれており、方相氏はすでに古語に類するものでもあったことを明らかにしている。また、「魑」とならんで、「俱」、「媿」、「顛」は追儼のさいにかぶる鬼面のことで、これらの文字にある「其」は、竹製の籠を意味しているため、おそらくは籠を連想させるかぶりものでもあったようである。その一方で、「顛」はもともと「醜」の義で、「顛醜」とは「顛頭」のごとく醜いということの意味しているために、「魑頭」そのものが醜怪にして怪物のような外見であったことも示すものであろう。

「黒の衣と赤の裳」も、やはり特別な意味をもっていて、方相氏のみならず、大儼で方相氏につきしたがう偃子一二〇人もみな、赤い頭巾と黒衣をつけていたことが伝わっている。その理由としては、異常のさいに、鬼神が格別にカラフルな服装をすることがあるようだ。『墨子』（明鬼編）によると、周の文王が鬼と化した杜伯に矢で射殺されたときに、この鬼は日中に白馬と白馬車に乗り、朱の衣冠、朱の弓、朱の矢をたずさえて現れたという。方相氏の衣裳もまた、このような異常な能力と雰囲気醸し出す効果をねらっているものといえよう。

さらに、方相氏が大喪、すなわち葬送の儀式で先導するとあるのは、古代中国での死者についての思想によるものである。死後でもない死体に鬼が乗り移ることができれば、鬼はそのからだによって生き返ることができると考えられていた。それゆえ、墓所には悪鬼が群をなして待ち構えているために、方相氏が葬列を先導することで、凶

邪なる鬼を追い払うという発想なのである。

鬼神である方相氏が悪鬼を駆逐するという発想は、死後の世界である冥界でも通用すると信じられていたようである。小林太市郎によれば、悪鬼が冥界でも邪をなすという信仰があったという裏づけとして、怪奇の面貌をなし、四つの目が造形された方相氏と思しき土偶が、六朝時代の土偶のなかにあるからである。

戈と盾もまた悪鬼威嚇のための武具であるが、儀式の過程でも特定の機能と意義があったとされる。悪鬼を呪詛する祈りを神霊に聴きいれてもらうために、神に祈り告げるための器を「毆つ」（または「毆つ」）という発想があり、『周礼』の方相氏に関する記述で、疫を「毆」ち、墓穴のなかで四隅を戈で「毆」つのも、儀式での祈禱の意味合いがあると思われる。すなわち、矛で「毆つ」ことで、四方にいる鬼を祓うのである。『周礼』の記述最後の部分、「毆方良」（方良を毆つ）についても、欧撃するのは、じっさいに物理的なものではなく、むしろ儀礼的なほうの意義があるのだろう。

ところで、この「方良」とは死人の脳を喰らう怪物のことで、鄭玄の注では「方良」と「罔両」が同一であるとし、また『國語』では、この「罔両」と「罔象」が山川に棲む鬼のうちで顕著な存在であるとしている。ここで重要なのは、方相氏との音の関係の近さであって、小林の図式化では、以下のとおりになる。

方良 (Fang Liang) = 罔両 (Wang Liang)
 方相 (Fang Siang) = 罔象 (Wang Siang)

この音の相似からは、方相氏が元来、鬼の「罔象」であったところのものが、「方良」にして「罔両」である悪

鬼を追い払う鬼神となつていく過程が推察されよう。すなわち、方相氏とは、方相を駆逐するための官職であつて、それは秋官の赤魃氏が赤魃（早魃を起こす鬼、転じて早魃そのもの）を退ける官職であつたのと軌を一にしている。『周礼』で記された方相氏をめぐる記述にみられる特徴、つまり怪物じみた仮面、熊の皮、赤色の奇抜な衣裳、戈と盾、従者などはすべて、方相氏がもともと鬼や獣神であつたことに起源を發し、それらの特徴はすべて、鬼を祓う儺の儀礼のなかで、古代からの風習と信仰にもとづいて論理的に機能しているのである。

四 日本の儺

古代日本の宮廷にみられる方相氏 宮中の儺の儀式を大儺たいなと呼ぶのであるが、『周礼』に記されているような大儺の儀式は、古代日本にも伝わつて、当時の宮廷でも儺（追儺）がおこなわれていた。平安初期の歴史書『続日本紀』慶雲三年（七〇六年）の記録が最古のものとされている。「是の年、天下の諸国に疫病ありて、百姓多く死ぬ。始めて土牛を作りて大いに儺す」（廣田律子『鬼の来た道』）。しかし、この記録では、儺がおこなわれたことは確かであるが、方相氏による儺ではなく、土牛どぎゅうといつて、疫病を祓うために、陰陽師が立てる土製の牛の像によつてなされたようである。

とはいえ、これから百年以上のちの弘仁二二年（八二二年）に成立した『内裏式』の「二月大儺式」には、陰陽師についての記述のあとに、方相氏のこと記されている。「方相一人取大舍人長大者為之、著仮面黄金四目玄衣朱裳、右執戈、左執楯、振子廿人取官奴等為之」（方相はひとり、大舍人のなかから長大な者を選んで、その役をさせる。黄金四つ目の仮面をつけて、黒い衣に赤い裳裾を着て、右手に戈をもち、左手に楯をもつ。振子は二〇

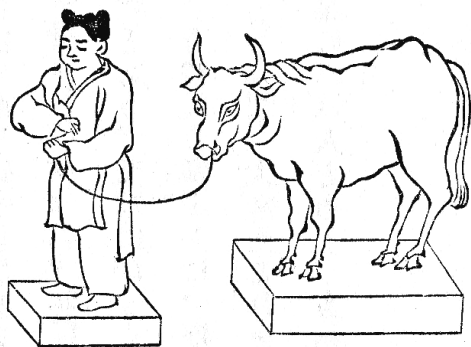


図2-4 『公事根源』掲載の土牛とともに立てられた
童子の像の図(関根正直『修正 公事根源新釋』)

人、下級官人を選んで、その役をさせる)。この『内裏式』の大儺の様式は、衣裳や矛および盾などの方相氏の特徴についての文言が『周礼』夏官の方相氏の項からとられており、日本でも中国にならって、儺のさいにははし振り子が方相氏につきしたがっていたことがわかる。また同様に、本章冒頭で述べた吉田神社の節分会における追儺式の様式が、『内裏式』で描かれているものに準じた古代の追儺式の原型をかなりとどめたままで、現在でもおこなわれているように思われるが、いかがであろうか。

延喜元年(九〇一年)成立の『日本三代実録』貞観十二年(八七〇年)一二月条には、「大祓」が朱雀門前でおこなわれたさいに、「追儺」がなされたという記録がみられる。

大祓は、諸人の罪や穢れを祓い清めるために、宮中や神社で六月と一二月の晦日におこなわれる神事で、『日本書紀』天武五年(六七六年)八月に最古の記録が確認できる。大祓の目的は、追儺と同様であることから、この時期には、神道としての大祓と仏教行事としての追儺という、このふたつの行事が並存していたようである。

『延喜式』「大舍人寮」おおとねりのつかさ延長五年(九二七年)の項には、四つ目の黄金の仮面をつけた方相氏が、親王以下の殿上人とともに、桃の弓と杖および葦の矢を用いて、宮城四門の外へと儺をおこなったとあるほか、『中右記』嘉承二年(一一〇七年)にも、同種の追儺が一二月三〇日になされたとある。この儺のさいには、儺声だせい

方相氏



図2-5 『公事根源』掲載の方相氏と疫鬼の図
(関根正直『修正 公事根源新釋』)

という、鬼を追うための罵り声か、洛中のいたるところで響いたといわれている。藤原道綱母の『蜻蛉日記』（九七四年以後に成立）にある「儺おにやらふとさわぎののしる」とあるのは、この儺声のことである。

室町中期の『公事根源くしこんげん』は、古典学者でもあった摂政関白の一条兼良が、宮中での年中行事や公事などの起源と沿革を記した書であるが、この有職故実書にも「四眼之鬼面ヲ蒙リ赤衣ヲ著シ楯鉾ヲ持チ悪鬼ヲ追ウ 之を方相氏ト謂ウ」とあって、追儺における方相氏についての記事は、室町時代を過ぎても、伝承されていた。と

はいえ、方相氏がおこなう追儺は、日本の宮中行事として一時期は普及したが、地方に普及することは少なかつたようだ。現在にまで伝承された方相氏の仮面の数が少ないことがその証左である。

ところが、その一方で、平安末期にはすでに、儺の儀式における方相氏の立場が逆転している記述もみられる。天永二年（一一一一年）成立の大江匡房撰述『江家次第えうけしだい』では、「殿上人於長橋内射方相」とあり、すなわち方相氏が儺子をつれて参入し、儺声をあげたのちに、滝口戸を出た方相氏を、殿上人が長橋内で桃の弓と葦矢で射たというのである。この逆転現象は、平安時代を経ていくうちに、儺での方相氏の役割が変容したことによるのだろう。



図2-6 クランパス
(谷口幸男・遠藤紀勝
『図説ヨーロッパの祭り』)

鬼を追う役割をになっていた方相氏が、その恐ろしい外見ゆえに、いつのまにか追われる鬼の役割を負わされたのである。

特定の儀礼におけるシンボリックな存在が、その意味をまったく逆のものへと転換させるという現象は、ヨーロッパでもみることができる。たとえば、サンタクロースを起源とする聖ニコラウスをめぐる現象は、地方によっては、方相氏と同様の変化がみられる。聖ニコラウスは現在のミラ（現在のトルコ）の大主教であったが、船から落ちて死んだ水夫を生き返らせた伝説や、貧しい娘に金をあたえたり、肉屋に塩漬けにされた子どもをよみがえらせた伝説ゆえに、航海および子どもの守護聖人とうたわれている。

しかしその一方で、アルプス地方では季節や一年の節目である一月から一月にかけて、日本のなまげのように、クランパスといわれる鬼をつれて、子どもたちにしつけをして回る慣習が残っている。このばあい、クランパスは、方相氏のような怪物の仮面をかぶっている。ところが、聖ニコラウス自身がクランパスの役割をになうことになって、子どもを連れ去ったり、子どもを喰らう恐ろしい存在に転化した伝承も残っている。

ひとつの慣習が長期間にわたって継続していくなかで、儀礼のシンボルが、鬼を追う者から追われる者へ、鬼を連れて歩く聖人が鬼のごとき存在へ、という存在意義の転倒がみられるのである。

『随書』（六五六年に全八五巻成立）では、大儺のさいに方相氏に導かれていく人数が総勢二



図 2-7 ベルンにある噴水に立っている
「子ども喰らい」の像は聖ニコラ
ウス起源である

(Becker-Huberti, *Der heilige Nikolaus.*)

○人を超える壮大な行列のようすが記述されていたが、中国での儺の儀式も、宮廷と民間では、時代がくだるにしたがって、枝分かれしていく。中国宮中での大儺では、宋代になると、方相氏と一二神獣の仮面は用いられなくなる。かわりに、門神、判官（鬼判）、鐘馗、小妹、土地神、竈神などの庶民の生活に深い関連がある鬼神を表象する仮面が変わっていった。

これとは異なって、民間での儺は「郷儺」と呼ばれており、六世紀の『荆楚歲時記』や『秦中歲時記』には、鬼神を模した仮面をつけた儺が民間でおこなわれていたことが記されている。この民間での儺をおこなう鬼神は男女一対であることが多く、とくに儺公と儺婆が貴州省の苗族や土家族の伝承で知られている。この男女の神は、中国古代神話の伝説の始祖神にして兄妹神の伏羲と女媧が起源であるといわれている。



図 2-8 儺公と儺婆
(後藤淑、廣田律子編『中国少数民族の仮面劇』)

そして、鎌倉時代以降の日本では、方相氏は、追い払われるべき鬼としての立場が定着していく。仏教信仰での鬼は、その恐ろしい容貌が示すような邪悪の存在であるが、まさしく、この邪鬼・悪鬼を追い払うべき威嚇のためであった善神方相氏の怪異な外見が、鬼との同一化をもたらしただのであろう。

柳田国男は、「一目小僧その他」で、日本各地に伝わる「一目の神や動物に対する信仰を考察して、一目小僧が「本拠を離れ系統を失った昔の小さい神」であるとし、祭祀のさいに人を殺す慣習があり、犠牲者は神の印として片目をつぶされるが、死後には神の眷族になるという信仰があったと考えた。この犠牲者の刻印がひとつ目であって、それが世俗化した結果、妖怪として語り継がれるようになったとしている。

柳田のこの意見とならんで、鬼が日本の記録に最初に登場したのは『出雲国風土記』であるが、「目一つの鬼」と記述されている。鎌倉時代には鬼と同一視されるようになった方相氏はもちろん、ひとつ目ではない。しかし、通常の双眸ではないところに、その特異性が人びとに看取されたということとは想像に難くない。また、『日本書紀』の「景行紀」には「山に邪あしき神あり、郊のらに姦かたましき鬼あり」と、鬼が邪神と対をなして記されているのも、鬼と神の関係が示されているという点で非常に興味深い。

そのほか、馬場あき子氏による鬼と神の同起源説の検証で

は、折口信夫の説を引き合いに出している。平安中期の漢和辞書の『倭名類聚抄』の「兎魅類聚第一七」（兎は鬼の古字）では、「兎は物に隠れて頭あちはるることを欲せざるゆゑに、俗に呼びて「隠おに」と云うなり」とあって、「於爾おに」、「於おに」は「隠おに」のなまりであるとしている。この事例から、古代では「死ぬ」ことを「身まかる」、「隠れる」といつたのと考え合わせると、古代日本の鬼には、中国の鬼きと同様の「他界に隠れた死者」という意味があつたことを示唆している。しかし、折口はこれに異をとなえて、鬼はけつしてかみと呼ばれることはなかつたが、「畏るべきところ」として近似した感銘から、おにをかみともいう場合があつたのではないかと推測している。馬場氏は折口の推測に従いながら、聖徳太子の母の名である穴穂部間人皇女あなほべのまほりのひめみこと、異母妹の名である磐隈皇女いわくまのひめみこを挙げながら、穴と鬼の関連性を明らかにしていく。すなわち、洞穴に棲む、そのぬし神の蛇が蛇神になると同時にまた、邪神にもなっていく過程から、蛇と神と鬼は、洞穴への不安と畏怖から生まれたという起源を同じくするものであると結論づけるのである。

これにくわえて、馬場氏は「鬼」の概念にいまだ不確定な要素があるとしながらも、日本の鬼の分類をおこなっている。

- 1 最古の原像としての鬼（祝福にくる祖霊や地霊）
- 2 道教や仏教を取り入れた修験道のなかで発展をとげた山伏系の鬼や天狗
- 3 仏教系の邪鬼、夜叉、羅刹
- 4 放逐者、賤民、盗賊などの凶悪な無用者が鬼と呼ばれるようになった者
- 5 怨恨、憤怒、雪辱などによって復讐をとげるために鬼になった者

これらの分類はさらに、1が神道系、2が修験道系、3が仏教系であつて、共通するのは、人にあらざる者の鬼であり、4と5はもとも人間であつた者が変化した鬼と特徴づけることができるだろう。この鬼の分類でいえば、方相氏は、その歴史的系譜のなかでは日本の宗教と関連してきたために、中国での正しく祀られた祖先の霊こそが鬼神の方相氏と同起源とする神道系、人ならぬ特殊な能力をもつものと考えられた鬼や天狗と同種とする修験道系、追われる存在としての邪鬼である仏教系という、それぞれの鬼の連枝をなしていると考えられる。

ひとつ目小僧の起源や、洞穴をめぐる鬼と神との関連は、方相氏の鬼との同一化の過程を考えるうえで示唆的である。いずれにせよ、追儺儀礼の中心人物であつた方相氏の四つ目に由来する邪視の能力への信仰は、その恐怖ともなう形相の仮面との関連で、容易に鬼と連想されるものであつただろう。最終的には、おもに仏教の修正会にとりこまれて、方相氏の存在は追われる鬼として固定されていったのである。

五 方相氏の四つ目

邪視の魔力 高山黙泉の『神秘・人相と骨相学』（一九三四年）によると、両目および脛を「田宅宮でんたくみやう」と呼び、これでその人物の狂気を判断するというのであるが、この書のなかで「猿猴えんこうの如き眼は発狂する相」と述べられている。このことは、獣のような眼やまなざしが、それをみる者にやはり一種の恐怖を沸きあがらせるものであることに起因しているにちがいない。その意味で、方相氏の仮面が怪物のような造作であり、さらに、その目が四つあることは、悪鬼をも震え上がらせる恐怖の根源でもあるのだろう。

こうした目の力をめぐる信仰はたとえば、そのまなざしの力がそそがれる者に害をあたえるとすると、それは「邪

「視」と呼ばれる。南方熊楠は、邪視をめぐる神話や物語が世界じゅうに存在していることを証明している。この邪視で生物を殺傷したという幻獣バジリスクとならんで、もつともよく知られたもののひとつは、古代ギリシア神話のゴルゴン三姉妹の物語だろう。この三姉妹は、金の翼、猪の牙、龍の鱗でおおわれた首、青銅の手をもつ美しい娘たちであったが、蛇の髪の毛が生えており、彼女たちをみる者は石にされたという。

三姉妹のなかで唯一不死身でなかったメデューサは、「びつくりさせる、ぎよつとさせる」という意味のフランス語の動詞 *meduser* の語源となっている。英雄ペルセウスは、その表面を磨きぬいた盾に反射した像を頼りに、恐るべき邪視の力で守られたメデューサの首をはねるのに成功する。ペルセウスはその後、争いのたびに、普段は袋に入れているゴルゴンの首をとりだして、相手を石に変えていったが、最後はこの首を戦いの女神アテナに献上



図 2-9 サンスーシ宮殿のアテナ像はメデューサの首がうめこまれた盾をもっている (筆者撮影)

する。この女神はつねに槍、兜、盾で武装していたが、その円形の盾にはメデューサの首をすえつけて、相手を石化させる武器とするようになったのである。

メデューサの首をめぐる神話の眼目は、恐ろしい邪の力を転用して、自身の武器となすところである。この長所と短所を表裏一体とする構図は、方相氏の素状とその外見に帰された力への信仰につうじる部分がある。本来は、鬼神および獣神である方相氏の力を象徴するいでたち、つまりは恐怖をもたらす金色の仮面、獣の皮、異常な色づかいの衣装、そしてあの四つ目の邪視の力によって、邪なる魑魅魍魎を祓うのである。

四つ目の由来　ところで、中村保雄が支持する説によれば、方相氏が四つ目であるのは、葬礼と関係を根拠にしている。方相氏は葬送の列を先導し、墓穴に入ったあとに、戈で四隅を「馘つ」ことで、四方にいる鬼を祓うのだが、この四隅に対応するゆえに、四方向分の目がついているというのである。この裏づけになるのは、方相氏をかたどったとみられる明器（死者とともに墓におさめた中国の器物）が、陵墓内の四隅に置かれていたことである。さらには、パリのセルヌーシ美術館が所蔵する明器土偶の方相氏の顔には、目がふたつしかなく、もうふたつの目はなんと背面についているのである。また、永尾龍造によると、妊婦はその胎児と合わせると、目が四つになるために、四目人といわれて、邪視の能力をもっていたとされることも、方相氏がもつ四つ目の力の根拠のひとつといえそう
だ。

なぜ方相氏の目にそのような力がやどるといふ発想が生じるのかという疑問には、古代中国の聖所を守護する信仰が参考になると思われる。そもそも、祭祀をなすような神聖な場所には、種々の呪禁をほどこし、みだりに人の出入りを禁じるのであるが、「防」と「限」という字に呪禁の痕跡が読み取れる。白川静によると、「防」の「方」は、

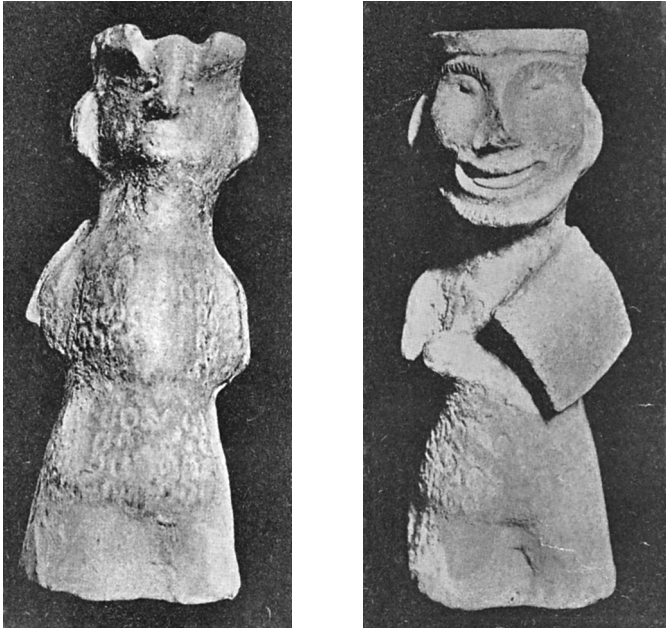


図2-10、2-11 前面と後面に眼がふたつずつある方相氏の明器土偶
(セルヌーシ美術館蔵、小林太市郎『漢唐古俗と明器土偶』)

「架屍」、供えられた死体をかたどったものであるために、祭梟さいきょう(さらし首を祀る古代中国の儀式)の場所を意味する文字で、「聖所に鬮體棚などを設けて、呪禁とするもの」であったという。「限」という文字もまた、「良」の上部をなすのは「目」である。その「目」の下部は、人がたちかえる形をあらわし、立ち入りがたい限界であることを示しているところから、その上部の「目」は「邪眼」であるとしている。すなわち、このふたつの文字は、「聖所に邪眼をおいて呪禁とすること」を表現しているのである。

ほかに、目についての特別な力が宿るといった考えは、鬼が目にもえない存在であるという信仰にも根ざしている。『老子中経』下巻にあるエピソードでは、人に災禍をおよぼす鬼を制圧するには、その鬼の正体が人鬼、妖怪、物精のどれかを看破する必要があると



図2-12 「限」と「邪眼」の
文字のなりたち
(白川静『漢字の世界』2)

し、その名を知ること、鬼はたちまちに邪の力を喪失するといわれていた。このような鬼の正体を看破する方法を、「視鬼」、「見鬼」という。視鬼の語は『史記』武安侯伝や『漢書』灌夫伝にもみられるが、「見」という文字の意味は「みる」だけでなく、「現」でもあつて、「発現」、「現形」の意味をもっているために、鬼の隠された実態を暴露することをあらわしているのである。

一般に、見鬼の能力をもつ者を、視鬼者、見鬼者、見鬼師と呼んだのだが、これとはべつに、「浄眼」ということばも存在した。「浄眼」とは、こうした能力をもつ人がその異能ゆえに、眼のひとつみが青く、清浄であると考えられたことに由来するものであろう。方相氏の鬼神にして獣神の目の効力は、聖所を守護する邪眼や鬼の正体を見破る浄眼の思想にも根拠をもつと考えられるのである。

六 方相氏の仮面

仮面劇として 追儺は演劇的儀礼であるために、仮面の役割は非常に重要である。中国では、儺の儀式では方相氏はずぐに姿を消していったのだが、民間の郷儺では、地方色豊かな多様な神々が災厄のシンボルである悪鬼を追い払ったために、神々の仮面は多種多様となった。たとえば、土地神としての翁おきなや媼おんななどの老体の面、道化役の神々を表現した滑稽の面、農業神および落雷で悪人をこらしめる駆邪神でもある雷公の面、『三国志演義』などに登場

する武将やその地方でのみ知られる武将をかたどった將軍の面、悪人を裁く官吏をイメージした判官の面、日本の鬼のように角や牙をもち、悪霊を退治する鬼神の面、身近な動物や崇拜対象でもある動物の顔をした動物面などである。

中国では意外と早い時期に用いられなくなった方相氏の仮面が日本にいつごろ伝来したのかは、いまだ明らかではない。とはいっても、中国や朝鮮半島から、飛鳥から平安までの時期に、伎楽面、舞楽面、行道面といった種類の仮面とともに伝わったとされている。そのため、これらの仮面との関連で、方相氏の仮面の性質もより理解されるはずである。

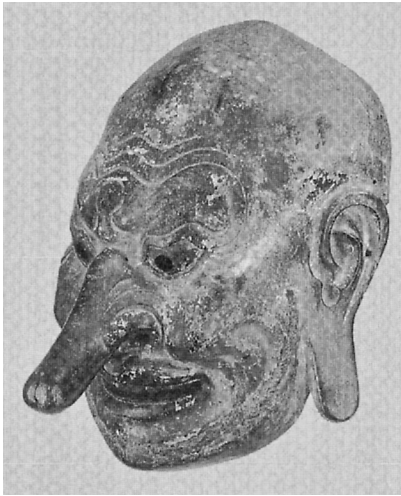


図 2-13 伎楽面
(廣田律子編『アジアの仮面』)

伎楽面は、推古天皇二〇年（六一二年）に百済の味摩之みましによって中国の呉の国から伝えられた日本最初の外来楽舞である伎楽で用いられた仮面である。伎楽はもともと仏を供養するための楽舞であったというが、飛鳥・奈良時代が最盛期であった。伎楽面の特徴は後頭部まで覆うタイプの大型面で、大きな鼻をもつものが多く、天狗のイメージの形成に影響をあたえたといわれる。舞楽は伎楽よりやや遅れて伝来したが、宮中儀礼芸能として、寺院行事や神社の祭祀にいたるほど広く伝播した結果、伎楽に代わるものとなった。舞楽面は顔面のみを覆うもので、鼻が動くものや下顎部分が別パーツになっているものも多い。この下顎部分が龍や蛇

六 方相氏の仮面

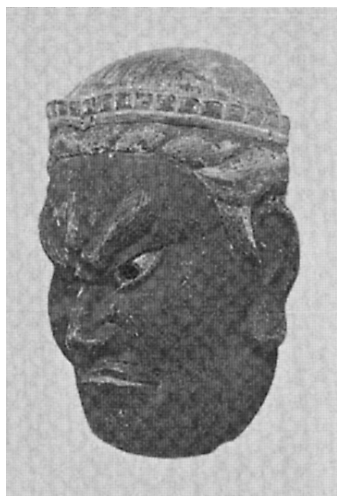


図2-15 行道面「多聞天」
(廣田律子編『アジアの仮面』)



図2-14 舞楽面「陵王」
(新潟県能生町白山神社蔵、後藤淑・
廣田律子編『中国少数民族の仮面劇』)

を表現しているものもあり、日本では雨乞いの儀式にも使われた。

菩薩が人びとに幸せをもたらすために来迎するのを表現するために、僧たちが行列をなして、読経しながらねり歩く法会である行道で使用されるのが、行道面である。行道面は、この行列で仏を守護する役目をもった者たち、夜叉天、乾闥婆、阿修羅、緊那羅、自在天、持国天、日天、月天、帝釈天、毘沙門天、龍天に扮するための仮面なのである。行道面のなかでも、菩薩面は仏像のように、穏やかな表情につくられているが、その一方で、仏を守護する役目の者の面は、こわおもてに造形されている。

これらの仮面に対して、方相氏の仮面は追儼に用いられるために、追儼面と呼ばれるが、じっさいに追儼に用いられたのは、方相氏の面だけではなく、かわりに毘沙門天や龍天の行道面が転用されて、鬼を追い払う役の者が着用していた事例も明らかになっている。毘沙門天の面が追儼の鬼の面といっしょに保管された

ままで発見されているのも、その証拠だろう。毘沙門天が仏を守護する役割をになっていたことから、追儼でも転用されるにいたったものと思われる。

ちなみに、追儼会で邪鬼を追い払う役を毘沙門天の仮面をかぶって演じるのは、呪師が多かったという。その証拠として、丹波猿楽と伊勢猿楽が呪師猿楽とも呼ばれていたという事実が挙げられる。呪師が猿楽にも参与していたことは、追儼と猿楽というふたつの仮面劇がやはり宗教的に同種のものに根づいていたのを示しているのである。

天狗のイメージ形成に寄与した伎楽面は、日本の神話に登場する猿田彦とも関連づけられている。猿田彦の怪異な容貌は長大な鼻で知られるが、『日本書紀』巻第二の描写によれば、長躯、光る口もと、そして、赤いほうずきのような眼は八咫鏡のごとく輝いたという。猿田彦がその赤い眼で、高天原から地上へ向かう八〇万の神々を金縛りにしてしまつたエピソードは、猿田彦がまさしく邪視の力をもっていたことを証言するものだ。その外見と能力ゆえに、猿田彦は天狗の先祖とみなされてきた。

方相氏、天狗、猿田彦は、その特徴に共通点がみいだされることに気づくだろう。日本の神話、修験道を媒介にしながらも、この三者は容貌怪異にして、鋭き眼光をもち、異能の者であること、ひとことではいえず、いわゆる「鬼」のイメージを共有しているのだ。方相氏が、鬼を追い払う者から鬼として追われる者へ変わっていった要因のひとつは、このあたりとも関係しているかもしれない。

邪視の力をもつ邪眼、呪力をもつ呪眼のイメージは、儼で鬼を払うのに着用されたこれらの仮面の造形にも意匠として強く意識されており、大きく見開いた眼、突き出ている目玉といった憤怒の形相を感じさせる造形となつている。方相氏の四つ目の黄金の仮面は、目の力を意識させる仮面のなかでも真骨頂たるものだろう。

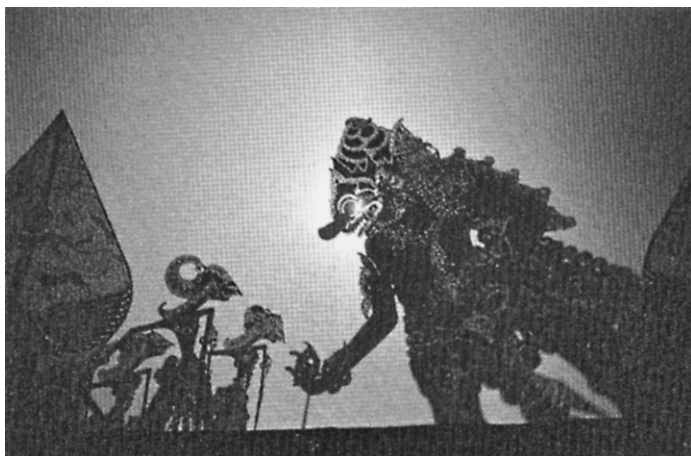


図2-16 ワヤン・クリの一場面（松本亮『ワヤンを楽しむ』）

儀式での仮面の機能 祭礼はそもそも神と人間が交流する場であるために、神を喜ばせるために演じられたのが、芸能の起源とされる。それゆえ、儀礼と演劇が結びついており、仮面劇そのものが儀式の一環でもある。このばあい、仮面をかぶることによって演じられる役が神であったのであれば、その演者には神が降臨して、まさしく憑依していると考えられたことであろう。

仮面をつけることで、仮面の人物がこれをみる者にあたえるネガティブな心理的效果はもともと絶大であるはずだ。なぜなら、隠された顔は、訝しさ、不審さ、困惑、不安といった感情をひきおこすからである。しかも、方相氏のばあい、それが四つ目を配した黄金の仮面なのであるのだから、きわめて異様な雰囲気を出しているのであって、それゆえにこそ、人はたとえば神性、恐怖、畏敬のような特異な感情をいだくのである。この効果は、火を焚いたり、音楽を流したりといった舞台装置ともあいまって、より強固に作用する。これが仮面劇における儀礼的效果のメカニズムなのだろう。

追儺という儀礼もまた、この仮面劇の効果が導入されている。

方相氏の仮面や衣裳、これにつき従う俵子のいでたちにみられる視覚的要素はもちろんのこと、方相氏が矛で盾を打つ音や、俵子が発する儺声といった聴覚的要素もまた、儀礼そのものの神性を高める効果を十分に發揮しているのである。

この儀礼と仮面劇の本質を、インドネシアのバリ島やジャワ島でおこなわれる影絵芝居のワヤン・クリがよく伝えている。インドの古代叙事詩『ラーマヤーナ』と『マハーバータ』を素材にジャワで土着した三〇〇以上の物語で、神々、悪鬼、英雄が主人公である。ワヤン・クリのステージ構成は、鉄琴奏者による音楽を背景にして、ダランと呼ばれる人形遣いが導演する影絵人形の影を、石油ランプで照らしながら、白幕スクリーンに映し出すというシンプルなものであるが、聖なる森のなかや河川のそばで、あるいは村の広場や寺院の境内で、夕暮れどきから上演されるために、おもに白と黒に彩られた幽玄を醸している。

ワヤン・クリは、影絵芝居ではあるが、魔除けの儀礼としての側面をもっており、もともとは神々を人型の影に憑依させる呪術であったといわれる。ワヤン開始まえには、香が焚かれて、ダランは祈りを捧げる。夜明けまで延々と続く芝居が展開していくなかで、神々の影絵は、じつさいに神々が降臨しているとみなされて、この劇場は、聖なる神々の世界となる。

仮面をかぶることによって、憑依した神を表象している方相氏の仮面劇が儀礼であるのと同様に、ワヤン・クリは、影絵のすがたをとった神々によって演じられる、いわば影絵芝居の儀礼なのである。

七 来訪神としての方相氏

方相氏にこめられたもの 黄金四つ目の方相氏の起源が、古代中国での死霊であるところの鬼であることはすでに述べた。それはつまり、鬼が死後の世界、つまり異界の住人であることを意味している。これとおなじく、獣神という素性もまた、日常の世界の住人でなかったことをますます強調するものである。この意味でやはり、方相氏は異界からやってきた来訪神である。

日本では、方相氏は中国から大饗という儀礼とともに伝来したために、その存在は（仮面もふくめて）当初から来訪神としての位置づけをもっていた。そもそも、外来の儀式のなかで用いられる仮面であったゆえに、古代においてはますます呪術的な信仰の対象であったにちがいない。

それゆえ、仮面にも神性が宿るとされることもあった。一部の寺社では、追饗の儀式で使われていた仮面じたいがご神体そのものとして大切に祀られていたことがその証拠である。

眼にみえない神ではなくて、人間がみることができずがたをした神が季節を定めて、または場所を定めて訪れてくるのは、共同体をふくめた世界の秩序を特定の時間に再構築するために、来訪神儀礼が営まれてきたと、諏訪春雄氏は述べている（諏訪春雄・川村湊編『訪れる神々』）。

『国文学の発生』（第三稿）において、折口信夫は「客」を「まれびと」と訓読みする事例から、この語の原義を説く。「まれ」とは、「最小の度数の出現または訪問」をいう語であって、「ひと」は人間の意味になる以前は、「神および継承者」を意味した。したがって、「まれひと」とは「来訪する神」にして、「人の扮する神」でもあり、時

を定めて来たり訪う」存在であったとしている。

方相氏の伝来した時期が最古の記録の『続日本紀』にある七〇六年以前であることのほかは不明であるとしても、方相氏という存在は、仮面によって神に扮することによって可視の存在であったり、節分の時期に決まって出現するということから、諏訪氏が言及する来訪神の条件と、折口が主張する「まれひと」という外来神の条件をみたしているのはまちがいない。

帰するところ、儼をおこなう方相氏という存在には、人間の知恵や思想がさまざまなかたちで宿っている。

まずは、人間の生死に関する思想、つまり古代からのアニミズムに由来する鬼や、邪悪におちいった鬼を恐れながらも、祖先の霊に守護を祈願する思想。これには、悪鬼の存在をみとめながらも、同じ鬼の力によって悪鬼を退けようとする、「毒を以て毒を制す」といった知恵も含まれる。また、冬と春、一年の終わりと始まりという暦や季節の区切りに、太陽や植物などの自然の死と再生をみいだす考え方。さらに、邪を退け、福を呼びこもうとする除災招福の習俗のほか、爾来の農作物豊作を祈願する農耕儀礼の性格をもっている。そして、生物の眼に超常の力が宿るといふ邪視についての信仰、およびこのような力が仮面にも憑依しているという信仰。

すなわち、人間が古来からいっていた自然全般に対するさまざまな感情、たとえば自然への願い、祈り、恐怖、畏敬など、くわえてこれらを包括する世界観ともいうべきものが、儼という儀式とこれをおこなう方相氏の役割のなかに看取されるのである。

参考文献

- 萩原秀三郎 『鬼の復権』 吉川弘文館 二〇〇四年
- 折口信夫 『古代研究Ⅲ 国文学の発生』 中公クラシック 二〇〇三年
- 春日武彦 『顔面考』 河出文庫 二〇〇九年
- 神奈川大学人文研究所(編) 『芸能と祭祀』 勁草書房 一九九八年
- 葛野浩明 『サンタクロースの大旅行』 岩波新書 一九九八年
- 後藤淑、廣田律子(編) 『中国少数民族の仮面劇』 木耳社 一九九二年
- 小林太市郎 『漢唐古俗と明器土偶』 一條書房 一九四七年
- 澤田瑞穂 『見鬼考』 『天理大学学报』 第八二所収 一九七二年
- 白川静 『漢字の世界 中国文化の原点』 1-2 平凡社ライブラリー 二〇〇三年
- 白川静 『字統』 平凡社 一九九九年
- 関根正直 『修正「公事根源新釋」』 第一書房 一九八六年
- 谷口幸男、遠藤紀勝 『図説ヨーロッパの祭り』 河出書房新社 一九九八年
- 長尾龍造 『支那民俗誌』 国書刊行会 一九七三年
- 中村喬 『続 中国の年中行事』 平凡社選書 一九九〇年
- 中村保雄 『神像から仮面へ——翁面と男女の面を中心に——』 『芸能史研究』 第五一号所収 一九七五年
- 馬場あき子 『鬼の研究』 ちくま文庫 一九八八年
- 廣田律子(編) 『アジアの仮面 神々と人間のあいだ』 大修館書店 二〇〇〇年
- 廣田律子 『鬼の来た道 中国の仮面と祭り』 玉川大学出版部 一九九七年
- 星野紘、芳賀日出男(監修) 『日本の祭り文化事典』 東京書籍 二〇〇六年
- ルネ・マルタン(監修) 『図説ギリシア・ローマ神話文化事典』 松村一男訳 原書房 一九九七年
- 松本亮 『ワヤンを楽しむ』 めこん 一九九四年

柳田國男 「一目小僧その他」『柳田國男全集』6 ちくま文庫 一九八九年
Manfred Becker-Hüberti: *Der heilige Nikolaus. Leben, Legenden und Bräuche*. Köln 2005.